高志中学校の1年生90名が、三方青年の家において5月17日から19日の二泊三日の日程で宿泊学習を行いました。

高志中学校では、「ふるさとの学習」「キャリア形成」「課題探求」の3つのプログラムで、 ふるさとに誇りを持ち、グローバルな視野を持って新しい分野に挑戦し、社会を変革してい く人の育成を目指した「高志学」を実施しています。その中の「ふるさと学習」の一環とし て、三方青年の家を拠点に、若狭湾エネルギー研究センター(敦賀市)、里山里海湖研究所、 若狭三方縄文博物館、海浜自然センター(いずれも若狭町)の4つの施設を回り、研修を行いました。

里山里海湖研究所では、17日の午後と18日の午前中に3人の研究員が、それぞれの研究分野を活かした研修を行いました。

研修①「水月湖の年縞について(座学)」(担当:北川主任研究員)

年代測定の世界の基準となっている「水月湖の年縞」について研修を行いました。「水月湖の年縞」が発見されてから、世界の標準時計となるまでの概略や、「年縞堆積物」が形成される仕組み、現在行われている花粉分析やそこから見えてきた昔の環境復元などについてスライドを用いた説明が行われました。



研修②「湖の堆積物を探る(フィールドワーク)」(担当:北川主任研究員)

「水月湖の年縞」に含まれている花粉などから過去の環境を復元するという研究が進められていることを踏まえて、三方湖畔において『あなたたちが100年後の研究者だとして、湖を分析するとどんな環境が復元されるか』をテーマにフィールドワークを実施しました。「今」の環境を復元するために必要な「湖の堆積物に含まれるもの」を実際に湖の周囲の環境を見ながらグループで話し合い、まとめました。



研修③「三方五湖の自然再生護岸について(座学)」(担当:石井研究員)

三方五湖の環境保全について、「コンクリート護岸」に焦点を当てた研修が行われました。コンクリートの護岸は田畑や 民家などを守るために作られたものである一方で、湖岸に生 育していた植生がなくなったり、魚などの湖の生きものの減



少を招いたりといったことも起きており、どのようにバランスをとっていくか、ラムサール 条約登録湿地の考え方である「Wise Use (ワイズユース:賢明な利用)」に基づいた今後 の利用法について考察を行いました。また、1947 年以降の鳥浜地域の空中写真を用いて、 コンクリート護岸によって変化してきた三方湖周辺の環境について話し合いが行われまし た。

研修④「三方五湖の文化多様性(座学)」(担当:中村研究員)

里地里山文化の分野の研究を行っている中村研究員からは、 三方五湖の漁労文化を中心に、食文化、若狭地方に伝わる祭 礼など文化面の研修がありました。三方五湖は塩分濃度が異 なることから生息している魚の種類が豊富で、それによって さまざまな漁法が行われていること、また、コイやフナ料理 といったこの地域特有の文化も発達していることなどの学習 が行われました。



研修⑤「三方湖のウナギ漁について(聞き取り)」(担当:ふるさと研究員 吉田氏)

三方湖の名産であるウナギ漁について、地元で 50 年漁師をされている吉田さんに聞き取りをする形式で研修が行われました。生徒たちは、「三方湖のウナギの特徴は?」「エサは何を食べているのか?」「ウナギ漁の仕方は?」などの質問しながら、熱心に話を聞いていました。



研修6 「三方五湖の塩分濃度測定と自然観察(実験・観察)」

(担当:石井研究員・土橋研究事務員・小嶋相談員)

三方五湖それぞれから組んできた水をビーカーに入れ、生徒一人一人が塩分濃度を測定し、それらがどの湖のものかを考えました。海水湖である日向湖と淡水湖である三方湖についてはすぐに正解を導き出し、汽水湖である久々子湖、水月湖、菅湖については、微妙な塩分濃度の違いと海からの距離を手掛かりに、グループで相談しながら答えを出していました。



また、研究所テラスから三方湖に浮かぶカモ類や特定外来生物であるミシシッピアカミミガメなどの観察も行いました。

最後に、石井研究員からヒシの標本を見せてもらい、その長さに驚いていました。